

前主日はルカ福音書から「年若いマリアがたった一人で降誕の出来事を担った」ことに注目した。マタイ福音書に目を転じてみれば、降誕に際しては養父ヨセフが重要な働きをしている。

純朴な妻と嬰兒を伴ってエジプトで逃亡生活をし(マタイ 2:14~15)、ようやく帰郷することになっても残虐なアルケラオが統治していたため、辺境のガリラヤへ引きこもることにした(2:21~23)。

沈着冷静で行動に躊躇がなく、夢に現われた天使に従うほどの敬虔なヨセフによって、嬰兒イエスの命は守られた。

「母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった(1:18)」。

「聖霊によって～」とあるが、婚約者ヨセフにしてみればあずかり知らぬ妊娠なので、「ひそかに縁を切ろうと決心した(1:19)」。これを表ざたにすればマリアは処刑されてしまうので、ヨセフは胸にある屈辱感をぐっと堪えて「ひそかに縁を切ろう」と決心したのだろう。

心晴れないその夜、主の天使が夢に現れてとんでもないことを告げる。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである(1:20)」。

ヨセフはその言葉を受け入れ、しばらく禁欲した(1:24~25)。想像力を働かせてヨセフのことをもっと思い描こうか。

ヨセフの選択肢は三つ。①「マリアの不義を表ざたにする」、②「ひそかに縁を切る」、③「嫁として迎える」。①だと律法に沿ってマリアは処刑される(申命 22:23~24)。②だとマリアは蔑視されるシングルマザー。③だとヨセフは屈辱を耐え忍ばねばならない。だから消去法で②を選んだ(マタイ 1:19)。

「夫ヨセフは正しい人であった(1:19)」。「正しさ」とは何か。正しさとは律法に忠実なことだから①のはず。正しさを実行する理由は、「あなた(たち)の中から悪を取り除く(申命 22:24)」ため。しかしヨセフには、悪を排除する正しさが残酷で見るに忍びなく、②を選んだ(マタイ 1:19)。

私はここをこう読む。ヨセフは「正しい人」だったから②を選んだのではない。正しいヨセフは自らの「正しさ衝動」をなんとか抑えて①を拒否したのではないか。②は彼なりの「愛」であった。

しかし天使が命じた③はそれ以上で、もっとも困難で、もっとも屈辱的で、ヨセフの能力を超える恐ろしい未知であった。

夢に現れた天使は言った。「ヨセフ、恐れるな、マリアを迎えよ(1:20)」と。「恐れるな」は降誕に際して、ザカリアに(ルカ 1:13)、マリアに(1:30)、羊飼いらに(2:10)語られる言葉。

ヨセフは夢で聞いただけの「恐れるな」という天使の言葉を正面から受け取ってしまった。その受け取った御言葉が内部から彼の正しさを打ち壊した。

そもそも人間の正義はどれほど「正しい」のか。ヨセフは世間が丸く納まる「人間の義」に従うのではなく、もっとも屈辱的な「神の義」に従った。ヨセフの許容量はせいぜい②を選ぶ優しさ程度だったが、真正面で受け取った御言葉が慣れ親しんだ己自身を打ち壊した。

「ヤコブは眠りから覚めて言った。〔まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった〕(創世 28:16)」。

ヤコブは「この場所におられる」神の御守りを夢で知り(28:15)、旅を続けた(29:1)。

ヨセフは自我よりも深い夢に従い、私たちも御言葉によって自らの使命を自覚し、従っていきたい。



《おまけのひとこと》

正しさは世の歯車 錆がなく 歪みがなく 摩擦がないほど良い とはいえ 錆びた歯 歪んだ歯 欠けた歯もあり イエスのどれもが当てはまっている ということは 彼は正しさにほど遠いのか